

新たな不登校が生じない取組 「未然防止」の取組

不登校が生じない魅力ある学校・学年・学級づくりの推進

【取組1】(A中学校)

学級内にホワイトボードを設置し、提出物の期限などを書き込んだ一覧表を掲示した。提出物の提出に向けて、計画的に取り組むことが苦手だと感じる生徒にとって、提出物の状況を把握しやすくなり、提出物の出し忘れが減少した。提出物を確認できて安心という生徒の感想が聞かれ、生徒の自己肯定感を育むことにつながり、安心して学校生活に取り組むことができるようになっている。

【取組2】(A中学校)

生徒会と児童会が合同で校則の見直しに関する提案を教員に行った。生徒が主体となってプレゼンテーション資料を作成して教員に説明し、「自分たちが学校をつくる」という意識で生徒が主体となる学校づくりに取り組んでいる。

生徒会役員の生徒だけではなく、各委員会の活動も活発である。各生徒がそれぞれの立場で互いに支え合っていることに感謝し、気持ちを伝える「ありがとうメッセージ」の企画が実施され、全校で協働しながらより良い学校を目指す風土が醸成されている。



小・中学生合同会議



教員にプレゼンテーション

【取組3】(B中学校)

「温かい学校づくり」という学校経営方針の下、様々な取組が実施されている。学期末には、学期中の取組を振り返り、反省だけでなく、友達の良さを発見し「〇〇してくれて助かった」という記載をできるようにワークシートを工夫して、前向きな振り返りを促している。互いの良さを認め合い、他者から感謝されることで、友達の役に立っているという自己有用感を高める取組となっている。

【取組4】(C中学校)

管理職をはじめ多くの教員が校内別室を利用する生徒に声掛けを行うことで、生徒が周囲の大人との信頼関係を育み、自信を取り戻す事例が見られた。

校内研修では、教員が受容的に接することや生徒に応じた配慮が重要であることを説明した。こうした取組を継続して若手教員にも意図的に伝えていく必要があることなどをスライド資料を用いて説明した。



多様な学びの場を確保する取組

（「早期支援」及び「長期化への対応」の取組）の推進

支援会議（C中学校）

管理職、SC、養護教諭、生活指導主任、特別支援教育コーディネーター、各学年主任、不登校対応巡回教員等がそれぞれの立場や専門性を生かし支援の在り方を検討している。生徒一人一人の状況に応じた支援について協議している。



アウトリーチによる支援（D中学校）

外出できない生徒に対し、担任や保護者と連携し、不登校対応巡回教員が段階的に家庭訪問を重ねて信頼関係を築いた。その結果、徐々に校内別室に登校できるようになった。校内別室で、学年教員等と関わり、登校に対する不安や悩みが軽減され、安定して登校できるようになった。

校内別室における支援（B中学校）

人と関わることに苦手意識がある生徒に、不登校対応巡回教員が関わって信頼関係を築き、その後、担任、学年教員、他学年の教員など、信頼できる大人を増やし、生徒の希望に応じて必要な支援を行った。養護教諭、不登校担当教員、不登校対応巡回教員が週に1回程度以上、支援の方法などの打合せを行って、生徒の状態を共有しているため、生徒一人一人の状況に応じた段階的な支援を行うことができている。登校することによって不安がある生徒の話を不登校対応巡回教員と養護教諭が聞き、受容的に受け入れて当該生徒の不安の軽減に努めている。



デジタル機器を活用した支援（D中学校）

学校行事の前日指導の様子を校内別室でオンライン接続し、その様子を視聴することで不安感を軽減して学校行事に参加できる環境を整えている。その結果、校内別室を利用する生徒が生徒総会や学年集会等にも参加できるようになった。



関係機関との連携（C中学校）

教育支援センター（登校支援教室）と連携し、生徒の状況に応じて、教育支援センターの見学や体験を実施できるようにした。教室以外の複数の居場所を利用できるようにし、不登校の生徒の不安の解消に役立てている。



成 果

教員が生徒に対し、受容的な関わりを続けた結果、生徒が「気にかけてもらっている」という安心感をもてるようになった。「この学校の生徒でよかった」という声も出ている。

課 題

不登校生徒や登校しぶりがある生徒にどこまで積極的に支援してよいか迷うといった教員の意見があるため、校内研修の更なる充実を図る。